使徒 2:36-42「初代教会の誕生」

「『だから、イスラエルの全家は、はっきりと知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです』　人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、『兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか』と言った。すると、ペトロは彼らに言った。『悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によってバプテスマを受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子どもにも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです』　ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、『邪悪なこの時代から救われなさい』と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々はバプテスマを受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」

十字架につけられ、復活なさった主イエスキリスト。このキリストを、ペトロが宣べ伝えたとき、居合わせた人々は、大いに心を打たれました。そして、めいめいが罪を悔い改め、主イエスキリストを救い主として信じ、バプテスマを受けました。その数およそ三千人に及んだ、と言われています。この人々は、心を一つにし、使徒の教えを学び、相互に交わりをし、共に食事をし、熱心に祈っていました。こうして初代教会、最初の教会が誕生したのです。

教会とは何でありましょう？　教会が誕生してこの方、二千年近くが経過しております。この二千年来、教会がずっとそうして来たように、わたしたちもこの日、主の日に、共に集まって、祈っております。

教会とは何でありましょう？　わたしたちがこのようにして集まることの意義は、どこにあるのでしょう？　そもそも教会は、どこで生まれ、教会とは、何であり、教会は、どこへ行こうとしているのでありましょうか。

教会とは何か、ということを考えるとき、パウロが書きましたエフェソの信徒

への手紙に、興味深い言葉が記されています。パウロはそこで、「教会は、キリストのからである」ということを、述べているのです。

しかし、それ以上に興味深い言葉があります。この言葉です。エフェソの信徒への手紙第2章4節から6節をお読みいたします。（新約353ページ）

「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし―あなたがたの救われたのは恵みによるのです―キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」

ここに、教会は何なのか。教会は、どこで生まれたのか．教会とは、何であるのか。教会は、どこに行こうとしているのか、が明瞭に述べられております。教会のアイデンティティーが、ここで、明瞭に述べられているのです。

教会は、どこで生まれたのか。

その始まりにあるのは、神の愛であります。憐れみ豊かな神が、わたしたちを、しかも、罪のために死んでいたわたしたちを、この上なく愛してくださった。この愛によって、教会が生み出されたのです。神の愛が教会を生んだ。

「この上なく愛してくださった」と言われていることに注意いたしましょう。だれにもまして、何にもまして、どのようなものにも優って、神は、わたしたちを愛してくださった。これ以上と言うことがないほどの愛で、愛してくださった、ということであります。

しかも、「罪のために死んでいたわたしたち」と言われていることに注意いたしましょう。わたしたちの側に、何か取り柄があったわけではない。わたしたちの側に、何か優れた点があったわけではない。わたしたちに、何か愛されるべき良きことがあったわけではない。そうでなく、罪のために死んでいた、と言われているのです。罪のため、もろもろの悪のために、死んでいた、つまり、これ以下と言うことがないほど絶望的なまでに、最低の状態にあった、わたし

たち、ということです。

これが十字架の垂直の線であります。すなわち、これ以下というものがないほど最低の状態にある、わたしたちがおります。そうして、これ以上というものがないほどの愛で愛してくださる神の愛があります。この二つが結ばれて、十字架の垂直の線が構成されているのです。それが、目に見えるかたちとなって実体化したものが、主イエスキリストの十字架と復活であります。

パウロは言います。「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし―あなたがたの救われたのは恵みによるのです―キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」

朝、起きて、鏡に映った自分の顔を見るとき、昨日のいろいろな嫌な出来事を思い出して、最低の気分になることがあります。いったい、これ以下と言うことができないほど絶望的なまでに、最低の状態にある自分、というものを、鏡の中に見なければならない朝、というものがあります。

そのような「罪のために死んでいるわたし」というものを、神は、これ以上というものがないほどの愛で愛してくださっている。そうパウロは言うのです。しかもそれは、口先だけで愛している、というだけのものではありません。わたしたちを赦すために、神のひとり子である主イエスキリストを十字架につけてしまうという、それほどまでの愛でもって愛してくださっている、と言うのです。ここに、わたしたちの人生の希望があります。

そうして、この神の愛が、教会を生み出したのです。

主イエスキリストは、こうおっしゃいました。ヨハネによる福音書第 12 章 32 節の言葉をお読みいたします。(新約 193 ページ)

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」

ロシア正教やギリシャ正教など、東方正教会には、「栄光の神学」というものが伝えられております。これは、十字架の垂直の線について、深く思い巡らそうとするものであります。すなわち、最低のところにいるわたしたち。このわたしたちを深く憐れんでくださった神は、これ以上はないというほどの愛でもって愛してくださった。この愛ゆえに、神は人となって、主イエスキリストとなって、降りて来てくださった。わたしたちのところまで降りて来てくださった。わたしたちに届いてくださった。これが、上から下へくだるところの愛であります。

そうして、「栄光の神学」は、さらにその先を、考えようとするのであります。すなわち、神は、わたしたちに届くために、高きから低きに下られた。だが、それだけに留まらない。神はまた、低きにいるわたしたちを抱きかかえて、高きに引き上げようとしてくださる。ご自身の栄光のうちに、わたしたち罪人を引き上げてようとしてくださる。いや、すでに、引き上げてくださったのだ。そう考えようとするのが、「栄光の神学」であります。

主イエスキリストは、こうおっしゃいました。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」

ここに、主イエスキリストの復活の秘義があります。主は、復活なされたとき、死んでいたわたしたちをも、ご自身と共に復活させてくださったのであり、さらに主は、ご自身と共にわたしたちをも、天にまで引き上げてくださったのだ、ということです。

まさにこのことを、パウロは述べているのです。「しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし―あなたがたの救われたのは恵みによるのです―キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました」

朝、起きて、鏡に映った自分の顔を見るとき、昨日のいろいろな嫌な出来事を思い出して、最低の気分になることがあります。いったい、これ以下と言うこ

とができないほど絶望的なまでに、最低の状態にある自分、というものを、鏡の中に見なければならない朝、というものがあります。

しかし、パウロがここで宣言している言葉は、それをわたしたちが文字通り受け取ろうとするならば、その衝撃のために鏡は粉々にくだけ、わたしたちの体も、わたしたちの骨までも、震えずにはおられないようさせるものです。

すなわち、罪のために死んでいたわたしたちが、主イエスキリストと共に生かされた。主イエスキリストと共に復活させられた。主イエスキリストと共に天に上げられた。主イエスキリストと共に王座に着かせられた。そうパウロは宣言するのです。

そうして、ここに、教会は立っております。教会は、この地点に、立っております。パウロが宣言するこの地点に、教会は立っているのです。

教会は、どこにあるのだろうか？　教会は、主イエスキリストと共に復活させられ、教会は、主イエスキリストと共に天に上げられ、教会は、主イエスキリストと共に王座に着かせられている。ここに、この地点に、教会は立っているのです。

そうして、これこそが、わたしたちのアイデンティティーであります。わたしたちは、よく歌いなれたあの歌、この歌、というものが、あるでしょう。わたしたちは、記憶すべき偉大な歴史、というものを持っているでしょう。わたしたちは、長く継承して行くべき良き伝統、というもの大切にしているでしょう。わたしたちは、親しみと愛着のこもった礼拝のための建物、というものを維持しているでしょう。

しかし、教会とは、ほんとうは何であるのか、ということを問うたときに、わたしたちは、「ここだ。ここ。ここに、わたしたちは立っているのだ」ということを、言わなければなりません。すなわち、わたしたちは、最低の罪人であったのに、この上ない神の愛によって愛されて、主イエスキリストに結ばれ、共に天上で王座に着かせられているのである。

その上で、わたしたちが注意すべきことは、「あなたがそこに立っている」と言われているのではないということです。パウロが、「あなたがたがそこに立っている」と言っていることに注意しなければなりません。「あなた」ではなく「あなたがた」です。

「あなたがた」と言われている。

すなわち、主イエスキリストは、あなたひとりを、最低の場所から、最高の場所に引き上げられのではない。あなたと同じように最低の場所にいた人々を、あなたと同じように最高の場所に引き上げてくださったのだ。どのようにしてか？　それは、あなたの場合がそうであったように、他の人々の場合も、まったく同じだ。ただ主イエスキリストの十字架と復活の恵みによって、あなたが引き上げられたように、他の人々も引き上げられたのだ。

ただ神の憐れみによって、このわたしは、最低の場所から最高の場所へ、引き上げていただいた。そうして、ただ神の憐れみによって、あの人も、あの人も、また、あの人も、さらには、あの人も、最低の場所から最高の場所へ引き上げていただいた。

いったい、最低の者と最低の者が取り合わされているならば、その間には、いっさいの比較が断たれてしまいます。最低と最低なのですから、どちらがより上だとか、どちらがより下だとかいうことが、不可能なのです。

まさにそれゆえに、わたしたち贖なわれた者たちの間では、互いに裁き合う、ということが本来的に不可能とせられているのです。しかしただ、神の愛への感激の応答として、互いに赦し合う、ということだけが、わたしたちの間で唯一可能とせられているのです。

これが、十字架の水平の線であります。そうしてこれこそが、教会であります。罪のために死んでいたのに、神の恵みと憐れみによって、赦されたわたしたち。わたしたちは、霊的には、主イエスキリストと共に復活せられ、主イエスキリ

ストと共に天に上げられ、主イエスキリストと共に王座に着かせられています。これがわたしたちのアイデンティティーです。

教会は、そのようなものです。わたしたちは、神の招きによって、そのようなものとされているのです。それゆえに、わたしたちは、こうして共に集まり、共に祈り、共に交わり、共に食事をしているのです。

わたしたちは、いまはこうして、地上で集まっております。やがて、天国で集まるようになるでありましょう。わたしたちは、いまはこうして、地上で祈っております。やがて、天国で共に祈るようになるでありましょう。わたしたちは、いまはこうして、地上で交わりをしております。やがて、天国で共に交わりをするでありましょう。わたしたちは、いまはこうして、地上で共に食事をしております。やがて、天国で共に食事をするでありましょう。

わたしたちが今日ここに、こうして集まっていることは、永遠の彼方に関係しおります。わたしたちが今日ここに、こうして集まっていることは、そのまま天国に連続しております。いや、むしろ、わたしたちは、ここに、こうして集まっていることのうちに、すでにして天国の生活のいくばくかを、先取りしているのです。

朝起きて、鏡に映った自分の顔を見るとき、わたしたちは、自分のほんとうのアイデンティティーを、思い起こさなければなりません。

日曜日、わたしたちが教会に集って、おたがいの顔を見るときに、わたしたちは、自分たちのほんとうのアイデンティティーを、思い起こさなければなりません。

どうか、聖霊が、わたしたちに、そのことを、思い起こさせてくださいますように。祈りましょう。

祈り

イエス・キリストの父なる神さま。
わたしたちの教会が、生ける神の子キリストを告白する信仰の上に立てられていることを、感謝いたします。教会の長い過去と、現在と、そして将来とを感謝いたします。
もちろん、わたしたちの教会は、弱くもろい土の器にすぎません。知りつつ、知らずして、多くの過ち、誤りを犯してきました。しかもなお、このような教会をも、福音の宝を盛る器としてお用いくださる恵みを、重ねて感謝し、み名を賛美いたします。
どうかわたしたちの教会が、この土地に置かれ、この時代を生きる群れとして、豊かにみことばを語り、喜んで人々に仕えることができますように、天よりの力を注いでください。
わたしたちの教会の霊の交わりが、深められ、広められますように。
ひとりびとりに自分のためだけでなく、教会とそれに連なるすべての信徒、求道者、その家庭のためにも祈らせてください。
絶えざるみ霊のとりなしをお願いします。
主イエスのみ名によって、アーメン。

（祈りは『わららの祈り』日本基督教団出版局、418 ページより転載）